

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	三國隆子 (みくにりゅうこ)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	人間科学研究科博士課程 3年
発表年月 または事業開催年月	2023年 7月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	こども環境学会2023年大会 (沖縄) アイムユニバースてだこホール・沖縄県浦添市仲間1丁目9番3号
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	三國隆子・佐藤将之
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	卒園した保育園とつながりを持ち続ける学童の発達面での効果 一日高どろんこ保育園と併設する学童保育室の学童と園児の園庭交流を事例として―
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>保育園に学童保育所が併設され、園庭での交流を通して園児と学童の子どもたちが関わり合う複合施設を調査対象とし、2022 年度に調査を行った研究成果をこども環境学会 2023 年大会で報告した。</p> <p>【発表の概要】</p> <p>保育園を卒園し小学校に就学した子どもにとって、小学校、学童保育所共に新しい環境であり、環境移行のギャップにとまどう子どもがいることが考えられる。このような環境移行のギャップを少しでも小さくする施設として、0 歳から小学校 6 年生までの最長で 12 年間を過ごせる「保育所」と「学童保育所」の複合施設の可能性があげられる。学童の子どもの成長発達において、卒園した保育園との関わりはどのような効果をもたらすのだろうか。本研究では、園庭を活用することで学童と園児の交流を実現させている複合施設において、年齢差の大きい学童と園児が何をきっかけに交流し、展開していくのか、園庭のつくりや園舎との配置が学童と園児の日常的な交流にどのように結びついているのかを明らかにすることを目的として行動観察調査を行った。</p> <p>園児との交流場面を 5 つの分析指標 (「行為の共有」「身体接触」「言葉」「身振り」「視線」) に基づいて分類した結果、「視線」による交流が一番多く見られ、学童の子どもは園庭の築山や木、砂場を活用し、園児に気づかれぬ距離感を保って見守っている場面が多く見られた。</p> <p>また、園庭の 5 つのエリアで交流が見られ、その中でも交流が特に多かった「保育室前エリア」では、学童の子どもの 9 割が卒園児であり、さらにその 9 割が 1 年生であった。調査を行った 5 月の時点では、1 年生にとっては卒園して 2 ヶ月の時期であり、保育園での関わりを求めて保育園に近いエリアで交流していることが明らかになった。</p> <p>【発表の成果】</p> <p>園庭での行動観察の手法について、複数のカメラによる行動観察を行ったことで園庭での子どもの様子を多面的に捉えられたことや声を拾うことの必要性について意見をいただき、分析の仕方について再確認することができた。また、保育現場に関わる保育者の方からのご意見や感想から、幼児期から児童期へのつながりの大切さと保護者視点など、気づきを得ることができた。</p>	

※無断転載禁止